

高校入試の「新傾向」問題について考える

— Communicative Language Testingの観点から —

内野泰子(早稲田大学)

1 はじめに

文部省が平成5年度より実施に移した新中学校指導要領では、「新学力観」と英語教育における「コミュニケーション重視」の方針が打ち出されており、同指導要領実施以来、中学校の英語教育のみならず、高校入試問題も、大きく変化してきていると言われる。

「新学力観」とは、従来の指導要領のもとでは「知識・理解 技能・表現 思考・判断 意欲・関心・態度」といった順に優先度の高さが保たれていたものが、新指導要領では、「個々の生徒の意欲・関心・態度」が最優先課題とされ、以下の優先順位も「思考・判断—技能・表現—知識・理解」と変化したことを意味する。新指導要領では、旧指導要領から逆転し、「知識・理解」の優先順位は最も低く位置付けられている。

また、新指導要領においては、「外国語の習得に対する生徒の積極的な態度を養い、外国語の実践的な能力を身につけさせるとともに、外国語についての関心と理解を高めさせるよう配慮する」など、外国語(主に英語)のコミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培うことが重視されるようになった。

本稿では、こうした2つの流れを受けた「新傾向」の高校入試英語問題の実例を分析し、それらが生徒の英語コミュニケーション能力を正しく測定するcommunicative language testとなっているか否かについて検討してみたい。

2 高校英語入試問題の新傾向

「新学力観」と「コミュニケーション能力重視」という文部省の新方針を受けた最近の高校英語入試問題には、「①日常生活のいろいろな場面での会話:ヒアリング問題を含めて、日常生活のいろいろなコミュニケーションの場面を絵や地図などで示す出題傾向が増えてきている、②手紙・電話・招待状などの表現:以前は、手紙や日記文の読解が多かったが、最近の問題は返事を考えさせるというコミュニケーション能力を問う問題が増えている」といった傾向が見えると分析されている。(1)

過去6年間の東京都公立高校の英語入試問題(2)の推移を例にとってみると、新指導要領実施の翌年・平成6年度よりこうした「新傾向」が顕著になっている。従来は対話文をベースにしている、実際には書き換えや内容についての正誤問題であったり、文法問題であったりすることが多かったが、平成6年度以降は、図表や地図、手紙などをベースに実際の英語コミュニケーションを考えさせる問題が目立つようになった。まず、平成6年度については、ある地区の地図を示し、道案内のための表現を選択肢の中から選ばせる問題が出された。また、平成7年度には、Kateという女性のスケジュール表を示し、これに基づく対話を選択肢から選ばせ完成させる問題が登場した。また、平成8年度には、パーティーの招待状を示し、こ

れをベースにした電話での会話を選択肢から選ばせて完成させるという問題が出された。

東京都の場合には、コミュニケーションの場面を設定していても、いずれも客観テスト形式にとどまっているが、埼玉県公立高校の英語入試問題⁽³⁾の場合には、平成6年度より実際的なコンテキストを与えて、それに見合う英文を書かせる主観テスト型の英作文問題を出題し始めた。まず、平成6年度の問題では、| 次のような場合、英語でどのように言いますか。— ①窓を閉めてもらいたい時。②相手の言うことがよく分からなかった時 | といった問題が出された。また、翌平成7年度には、| 次のような場合、あなたはどのようなメッセージを残しますか。英文2文で書きなさい。—土曜日の放課後、学校で友達のマイクからその日の2時に彼の家に来るように誘いを受けた。家に帰ったら、誰もいなかったので、夕方5時頃帰宅する予定でマイクの家に行くことを家族に伝える | といった詳しい状況設定の下での英作文が出題された。さらに、下記の(実例1)に示したように平成8年度には英文手紙の2カ所が空所になっており、①、②それぞれに条件にあった英文を書かせ手紙を完成させる問題が出題された。

(実例1)

October 28, 1995

Dear Kate,

Hello. My name is Taro Yamada. I got your name and address from the Pen Friend Club today. (①). I hope we can become good friends.

I will tell you about myself. I am a junior high school student. I am fifteen years old. (②). What do you like, Kate? Please write back to me soon.

Your friend,
Taro

①の条件: 文通できる喜びの気持ちを伝える文

②の条件: どんな趣味をもっているか伝える文

以上、東京都公立高校ならびに埼玉県公立高校の例を見て来たが、その他の多数の国立、公立高校、私立高校の入試問題⁽⁴⁾を概観してみても、従来型の読解、穴埋め、並べかえといった問題に加えて、上記のような| 新傾向 | 問題、すなわち日常的なコミュニケーション場面の対話文をベースにした問題や何らかの実際的なコンテキストを与えて受験者にそれらをベースに受験者自身に| 思考・判断 | させ英文を発想させる主観問題が近年増加しているという印象を受ける。

3 Communicative Language Testingの観点から見た| 新傾向英作文問題 |の有効度

Communicative Language Testingの専門家である Bachman/Palmer⁽⁵⁾は、言語テストの有効度(usefulness)、あるいは、質の高さ(quality)を判定するために、次のような公式を打ち出し、実際のテストでは、与えられた状況の中で下記の構成要素の総和を最大限もっていくことを目指すべきであると主張している。

Usefulness = Reliability + Construct Validity + Authenticity + Interactiveness + Impact + Practicality

ここでは、まず、前項で述べたような最近の「新傾向問題」をこの公式の各構成要素別に分析し、受験生の英語コミュニケーション能力を測るCommunicative Language Testingとしての有効性を考えてみたい。

3.1 Reliability

Reliabilityとはテスト結果の「信頼性」を意味する。これには、単一テストに含まれるテスト項目間にどの程度均質性があるかについての“internal consistency reliability”(内的一貫性信頼性)、同じ答案を異なる採点者が採点した場合にどの程度均質な採点結果が得られかについての“inter rater reliability”(採点者間信頼性)、同じテストを再度実施した場合どの程度得点が均質になるかについての“test retest reliability”(再テスト信頼性)などが含まれる。

特に「新傾向」問題の中の「考えて英文を実際書かせる」主観問題については、多数の答案を多数の採点者が1、2日という非常に短期間で採点しなくてはならない入学試験の場でinter rater reliabilityをどのようにして高めることができるかが重大な問題となろう。そのためには、受験生が書いた英文の採点時に使用することができる内容面、文法面、構成面等の妥当で明確な採点基準が必要となる。また、採点者には、そうした採点基準に基づき正当な採点を短時間に確実に行えるだけの英語能力やそのための研修などが必要となる。しかし、これらの必要条件を実現するのは現状ではなかなか難しいものと思われる。

3.2 Construct Validity

Construct Validity(構成概念妥当性)とは、テストで測定しようとしている言語能力特性をどの程度正確に測定しているかを意味する。Construct Validityについて考える場合には、まず、テスト作成・実施者が当該のテストで「どのような言語能力特性を測定したいのか」をはっきりさせる必要がある。従って、「英語コミュニケーション能力を測定しよう」という場合には、「英語コミュニケーション能力」とはどのような言語能力特性から構成されるものなのか、すなわち、「何が英語コミュニケーション能力なのか」、その概念をまず明確にする必要がある。これが明確になっていなかったり、的はずれなものである場合には、テスト自体のConstruct Validityを議論することさえ不可能になる。

「日常的な会話」や「日常的な手紙」をベースにした実例1のような問題でも、問題作成者がCanale/Swainが定義したCommunicative Competenceの4要素(grammatical competence, sociolinguistic competence, discourse competence, strategic competence)のすべてをカバーするようなコミュニケーション能力を想定しているかどうかは分からない。例えば、(実例1)の手紙文の場合、コミュニケーション能力をsociolinguistic competenceまで含めて考えれば、友達に対する手紙である訳だから、それなりのinformalなスタイルが必要となろう。しかし、コンテクストに見合わないスタイル、例えば、非常にformalなスタイルで書かれていた場合でも、問題作成者や採点者の「コミュニケーション能力」についてのとらえ方によっては、文法的に正しく書かれてさえいれば高得点が与えられる可能性もある。

また、Cumminsはコミュニケーション能力を日常的なやりとりに必要なBICS(Basic

Interpersonal Communication Skills)と知的・抽象的・アカデミックな活動に必要なCALP (Cognitive and Academic Language Proficiency)の2種類に分類しているが、新傾向問題を概観したところ、BICSを中心にしたものが多く、CALPをも「コミュニケーション能力」の一部としてとらえ問題に組み込んでいる例は非常に少ないとの印象を受ける。私立高校のリスニング問題で短いレクチャーを聞かせノート・テイキング形式の設問を出している所があったが、これは例外的なもので、リスニング問題は通常日常的なものを中心となっている。

3.3 Authenticity

Authenticity(真正性)とは、テストの中で課せられるタスクが実際にその言語が使われる場合の language use に近いものであるか否かを意味する。すなわち、テストの材料がいかにも authentic な material から選ばれていても、実際のテストのタスク自体が実際の言語運用とかけ離れていては、「見かけ倒し」で本当の authenticity があるとはいえない。「新傾向」問題をこうした観点から分析してみると、文部省の新指導要領にあわせて問題文は日常的な対話文などを採用しているが、それをベースに実際課せられる設問となると、無意味に複雑な並べかえ問題であったりして実際の言語運用能力とはほとんど関係ない特殊な「受験技術」がないと答えられないようなものも少なくない。特に、選別性を高める必要がある「難関高」の入試問題ではそのような傾向が多々見られるように思われる。

読解問題なら実際にコミュニケーションの手段として英語を読むのと同じようなタスク、英作文問題なら同様に実際に英文でコミュニケーションするためタスクを課して初めて、communicative language testing としての authenticity を実現できることになろうが、実際にこれを実現しているテスト問題は意外に少ない。テスト問題にコミュニケーション面での authenticity を持たせようと、実際的なコンテキストを与えた問題が増えてきていることは事実であるが、解答や得点にうまく反映されてくるコンテキストを与えているものは少ない。例えば、下記の実例2(国立大付属の問題)の場合にも、対話でコンテキストを与えているように見えるが、実際の問題は長い対話文を理解しなくても括弧内についてのみ英語にすればよいものである。すなわち、実質的には従来のコンテキストがない和文英訳問題とそれ程変わりがなく、対話文を読んだ受験生は解答に使える時間が少なくなり、かえって不利になってしまうかも知れない。

(実例2) (カッコ内のみを英訳する問題)

Tom: You look nice in that dress, Yuri. Is it a new one?

Yuri: Yes. I went shopping with my mother last Saturday.

Tom: Then, it was chosen by your mother, wasn't it?

Yuri: Yes... , but

Tom: Don't you like it? What's wrong?

Yuri: I wanted another one in the window, but (お母さんたら、それだと高くて手が出ないっていったのよ).

3.4 Interactiveness

Bachman/Palmerは、Interactivenessとは、受験者個々人が持つ特性(特に過去の経験や知識)がテスト問題を解答する際にトップ・ダウン的にかかわってくることを意味するとしている。すなわち、受験者のテストにおけるperformanceは、その人の言語能力(language competence)のみならず、その人が当該のトピックについてどのような背景知識(topical schemata)を持っているのかや、そのトピックやタスクについてどのような感情をいだいているのか(affective schemata)といったことすべてに左右されることになる。実際のコミュニケーション活動においては、当然のことながら言語能力だけでなく背景知識も重要な要素である。しかし、テストが言語運用能力自体を中心に測定することを目指すものである場合には、受験者各人が持つ背景知識の差がテスト結果にあまりにも大きな影響を及ぼすのでは、バランスがとれておらず、公正とは言えない。また、言語能力がなくても背景知識だけで答えられるような問題も不適切と言えよう。

「新傾向問題」の中でも、特に「思考力・判断力」を重視した英作文問題では、言語知識と背景知識をバランスよく測定するのがなかなか難しいように思われる。例えば、下記の(実例3)は「与えられた10都市(那覇、鹿児島、長崎、広島、高知、京都、軽井沢、東京、仙台、札幌)の中から1つを選び、dialogue中の①に都市名を入れたうえで、②を作成させる」といった問題である。この問題では、受験者各人が都市について持っている背景知識が大きく影響してくるものと思われるし、前述のinter rater reliabilityといった面から考えても、明確な採点基準(どの程度内容を重視するか等)が設けられていないと、採点にばらつきがでる可能性もある。

(実例3) (①に都市名/②に適当な英文を書き入れる問題)
(前略)

Kumi: Then, have you ever been to (①)?

Steve: No. But I want to go there some day.

Kumi: Why would you like to go there?

Steve: (②).

3.5 Impact

テストは、受験者個々人の学習方法・学習態度や教師各人の指導方法に波及効果(wash-back)を及ぼすだけでなく、教育システムや社会全般にも影響を及ぼす可能性がある。新指導要領に基づく新学力観やコミュニケーション重視の英語教育を受けた「新傾向」問題もこれからプラス、マイナス双方の種々のインパクトをもたらすことになろう。

中学の英語教科書が口語表現や対話を中心としたものに大きく変わってきていることもあり、受験者各人の英語コミュニケーション能力を適切に問う入試問題が増えていけば、英語が単なる受験のための必須科目ではなく、実際のコミュニケーションのための手段であるという認識は、個人レベル、社会レベル双方で今後さらに高まっていくことになろう。しかし、「新傾向」問題といってもauthenticityの項で述べたように結局は見かけだけで実際には旧態依然の受験技術を必要としたり、受験生が「自分たちは妥当に評価されている」

と納得できるだけのしっかりした評価基準がないようなものが多々あるようでは、そうしたプラスの波及効果はあまり期待できない。

また、実際の言語運用やオーラル・コミュニケーション、日常会話といった面を重視しすぎるあまりコミュニケーション能力の構成要素の中の基本となるべき「言語能力」特に基本文法の学習がおろそかになるようなマイナスの波及効果があれば、高校、大学におけるCALPも含めた英語能力の育成につなげるための基礎力を育てるのが難しくなろう。

3.6 Practicality

しかし、いかに理想的なcommunicative language testingを考えたところで、現実には必ず、practicality(実用性)が問題となる。Bachman/Palmerはテスト実施のために必要な資源(resources)として、(1)人的資源、(2)物的資源、(3)時間の3つをあげている。特に、日本の高校入試問題でcommunicative language testingを実現しようとする場合、最も深刻と思われるのは(1)の人的資源、特に適切なテスト作成者とテスト採点者の不足といった問題であろう。若林氏⁽⁵⁾が指摘するように、日本の「教員免許法施行規則」では中学・高校の教員免許状を取得するにあたって「評価」や「測定」に関する科目を履修することは必要づけられていないし、「言語テスト」を専門に研究している英語教師も比較的少数であると言われる。すなわち、入学試験という受験者には重大な結果をもたらすはずの試験が「テスト理論」の基本を身につけていない英語教師によって十分な吟味なしに経験のみを頼りに作成、採点されている場合も多々あるのではないと思われる。質の高いテストを実現するためには、特にこれまでの経験的蓄積がない「新傾向」問題の場合、テスト実施後、正解率や誤答など、テスト結果を綿密に分析し、次年度のテストにつなげていく必要もあろうが、これも人的資源、時間的制約の双方から十分に行われているとは言いがたい。

また、日本の高校入試問題に実用性をもたらすためには、Bachman/Palmerの公式で指摘しされていないもう1つの要素“discriminability”(選別性)が非常に重要となる。すなわち、現在の日本の教育制度のもとでは、入学試験は単なるproficiency test(熟達度テスト)やachievement test(到達度テスト)ではなく、選抜のためのテストであるから「高得点者」と「低得点者」のラインを引けるものでなくてはならない。一般に、言語コミュニケーション能力を測定するcommunicative testは、受験者全体の中での各人の位置付けを問題にする入学試験のような“norm referenced test”よりもある一定の能力を身に付けているかどうかを測定する“criterion referenced test”として適していると言われる。従って、入試で受験生各人の英語コミュニケーション能力を測ろうとすると、入試としての選別性の乏しいものになってしまう可能性があるといった矛盾も出てくる。

4 「新傾向」問題の実例検証

以上、Bachman/Palmerの公式をベースにcommunicative language testingの観点から「新傾向」問題の有効性を検討してきたが、実際の最近の高校入試問題を検討してみると、種々の制約の中でcommunicative testの有効度を高めようと工夫をこらしている「新傾向」問題もあれば、一見コミュニケーション能力の測定を指向しているようであるが、実際の設問に

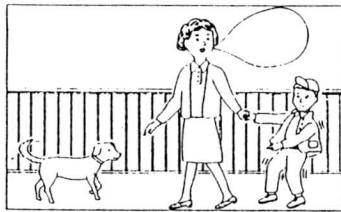
答えるのに必要なのは「コミュニケーション能力」でも「英語の知識」でもない「受験技術」であるといった問題もある。また、試験問題にコミュニケーション活動としてのauthenticityを与えようと色々な工夫をし、成功している例もあれば、そうした意図がうまくいかされていない失敗例もある。本項では、こうした側面からいくつかの実例を検証してみたい。

4.1 漫画を導入した英作文例

「新傾向」問題では、漫画や絵を導入し、コンテキストを与えながら英文を書かせるという問題がかなり見られる。下記(実例4)、(実例5)(ともに公立高)はいずれもそうしたものであるが、(実例4)の場合には、解答が多様になりすぎる可能性があり、受験者は何に基づき自分の解答が評価されるのか(場面への適切性か、創造性か、文法的正しさか)とまどう可能性があるものと思われる。一方、(実例5)の場合では、状況設定がより詳しくなり、使用すべき1語も与えられているので、解答としての多様性が減る。すなわち、(実例5)では、「考えて書かせる」という要素を保ちながら、解答者のとまどいを減らし、inter-rater reliabilityをある程度高めることができるよう工夫されている。また、与えられたコンテキストも解答の中にもうまくいかして書けるようになっている。

(実例4)

右の絵の母親の言葉として考えられる6語以上からなる英文を一つ作れ。



(実例5)

次の3つの絵は、少年たちが野球をしているときの出来事である。①~③の()内に与えられた語を用いて、話の流れにそのような英文を作れ。

Boy 1: Oh, no! We broke the window.

Man: (①) (ball)?

Boy 2: That man is very angry. (②) (what)?

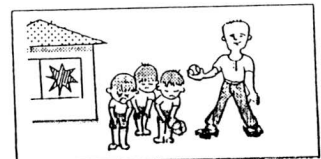
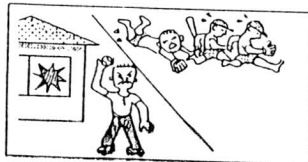
Boy 3: I'm scared, but we should go back and say, "sorry."

Boy 1: Hel...hello. We broke your window.

Boy 2: I am very sorry. We didn't mean to break the window.

Boy 3: We are really sorry. (③) (careful).

Man: Well, boys, I was very angry when you ran away. But because you came back to say "sorry," I feel better. Don't worry now.

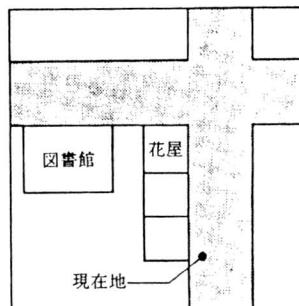


4.2 実際のタスク/実際的でないタスク例

前項3で記したように、communicative testのauthenticityを実現するためには設問自体が現実のコミュニケーション活動に近いタスクを行わせることが望ましい。しかし、そうしたタスク・ベースの問題であっても(実例6)(公立高)のように、極めて現実的なものもあれば、(実例7)(私立大付属高)のように図を書かせる所までは現実的であっても、そこから“face”という語を連想させる“実際的でない”タスクをクリアしないと得点につながらないような問題もある。

(実例6)

外国の人から“Please tell me the way to the library”と言われました。あなたは道順を教えるのにどのように言いますか。英語で簡単に書きなさい。



(実例7)

Draw a large circle in the box. Write a small c in the center of the circle. Draw a small circle next to the c, on the right. Draw a small circle next to the c, on the left. Draw a small line under the letter c. 上記の指示に従うと何の絵になりますか。4文字からなる英単語1語で書きなさい。(正解は“face”)

4.3 題材はcommunicativeであるが、タスクは|受験技術|を要する問題

一見するとコミュニケーション能力を測ろうとしているようだが、受験技術の有無が正否を左右するような並べ替え問題も多々見られる。(実例8)は、題材としては日常的なコミュニケーションを指向したもののように見えるが、実際の設問となると、現実のコミュニケーション活動とは程遠い解答方法が求められている。また、3番目と6番目にくる語のみしか問題にしていないので、文を正確に組み立てる基本的な英語力も測定できていない。

(実例9)は旅行パンフレットならびにそれに基づく対話文をベースにしたもので一見コミュニケーション指向の非常に高い問題のように見受けられる。しかし、解答で求められる並べ替え方法は(実例8)よりさらに複雑なもので、パンフレットの読解というauthenticな活動をベースにしているとはいえ、最終的には英語の運用能力とは無関係な特殊な受験技術にたけていないと短時間では答えられない。(実例8)、(実例9)はいずれも受験者数の多い難関私立高の問題であるため、選別性を高めるためにこうした問題設定が必要なのかも知れないが、問題の複雑さで選別性を高めるのはcommunicative language testingの観点か

らすると好ましくない。

(実例8)

()内の語を並び換えて英文を作る場合、()の中で3番目にくるものと6番目にくるものの組み合わせとして最も適切なものを下のア～エの中から1つ選びなさい。ただし、不要な語が1つ含まれており、文頭にくる語も小文字にしてあります。

私はこれしかお金をもっていない。

(all, I, money, the, this, that, only, have, is)

3番目	6番目	3番目	6番目
ア. all	have	イ. the	that
ウ. all	that	エ. the	I

(実例9)

Alice, Lisa, Susan John, Timの5人が観光パンフレットについて話しています。よく読んであとの問題に答えなさい。

(パンフレット)

1. Tibet Tour

Six days in one of the most unusual countries in Asia. Very few tourists go to Tibet. All around are the tallest mountains in the world. You will visit beautiful temples and crowded street markets. You will also see wonderful Tibetan dancing.

Length of trip: 14 days / Group size: 16 / Cost: \$6,000

2. Maui Bicycling Tour

Do you like exercise? Ride a bicycle around the most beautiful tropical island in the world. You will swim in the clear, warm, tropical water, and go camping in the beautiful national park.

Length of trip: 7 days / Group size: 9 12 / Cost: \$695

(中略)

4. American River Trip

Do you want to have exciting holidays? California's American River is one of the fastest, most exciting, and most difficult rivers to raft. You will never forget this trip! The trip is for people who love adventure only! You must be in good health.

Length of trip: 5 days / Group size: 8 10 / Cost: \$650

(対話)

Alice: I just love French food. (①) But, it's too expensive.

John: I'd (②) I'd like warm weather, too.

Tim: I like adventure and I'd like a trip in a small group. (③) to do. I'm very healthy.

Susan: I like adventure, too. But I have only three days for my vacation. (④).

(後略)

(問題)空欄①～⑤の発言を完成させるように、与えられた語句をすべて用い、さらに不足している語を1語それぞれの人と話している旅行案内の文中から用いて、英文を作りなさい。解答はそれぞれa～dに来る語句の記号を書きなさい。さらに不足している語を英語で書きなさい。なお、文頭に来るべき語も小文字で書き始めてあります。

① _____ a _____ b _____ c _____ d _____ .

ア chef イ famous ウ France エ is オ it カ of キ to
ク with ケ wonderful コ 不足語

② I'd _____ a _____ b _____ c _____ d _____ .

ア because イ I ウ join エ like オ need カ some
キ the bicycling tour ク to コ 不足語

(後略)

5 終わりに

現在の高校入試英語問題は、文部省が打ち出した中学校英語教育におけるコミュニケーション重視の方針や「思考・判断」を優先させる新学力観を入試という厳しい人的・時間的・制度的制約の中で何とか反映させ、かつ、選別性も保とうと出題者が奮闘している試行錯誤の時期にあるように思われる。出題者のそうした努力が実際にはっきり見てとれるものもある。しかし、一方では、テスト作成にあたってBachman/Palmerの公式の構成要素の中で考慮に入れられているのは出題者側の“practicality”のみであるような問題や題材をコミュニケーション的なものからとっただけで満足してしまったような問題、また、公平な採点を実現するのが難しいのではないと思われるような問題も少なくない。種々の制約の中でも受験者の英語コミュニケーション能力をより適切に測定できるような入試問題を実現していくためには、英語教員をめざす学生や現職教員の言語テストに関する知識を高めていくことが急務であろう。

(参考文献)

- (1) 「高校入試新傾向問題集 - 問題が変わった」、1996年、学習研究社
- (2) 「過去6年間東京都公立高校入試問題」、1996年、東京学参
- (3) 「埼玉県公立高校入試問題 - 6年間入試と研究」、1996年、声の教育社
- (4) 上記(1)～(3)に加えて、東京学参、声の教育社発行の首都圏十数校の過去問題集を検討した。本稿中の実例もこれらの資料に掲載されたものをベースにした。
- (5) Bachman, L. F., Palmer A. S., Language Testing in Practice, Oxford University Press
- (6) 若林俊輔、根岸雅史「無責任なテストが落ちこぼれを作る」、1995年、大修館書店